

メープルのレター(51)

イースター

寒い日々が一転して、明るい、暖かい春の青空が復活したのはイースターのことです。庭先には、あっという間にチューリップの紅い芽が土から顔を出しました。いよいよ本当に春かなあー。

連休のせいか、公園や街角には人出が多くなっています。緊急事態宣言はまだ解除されず、家族が、全員で集まって食事ということはなく、イースターの卵探しやチョコレート探しの子供達の姿も目にできませんが、欧米ではイースター(復活祭)は大事な伝統行事です。どこか浮き浮きした気分です。

イースターには子羊の料理が伝統なようです。ドリトル先生は毎日、「イースターの子羊」とマダム田中に唱えています。夫婦二人で子羊のローストは食べきれそうもありません。今年は、手抜きをして、北京ダッグにすることにしました。どさっと、一羽、ローストした鴨をチャイナタウンで買い込み、クレープや他の具材も揃え、焼きたての鴨の皮をクレープで巻き、頬ばります。ケベック産の鴨は脂がのっていて、北京ダッグにするには最適なのだそうです。美味しいこと。

娘から

「そろそろ、体の抵抗力もついてきたし、医者にオーケーもらったから、娘に会いに来ない？」と連絡があったのはイースター前夜のことです。

「あらー、嬉しい。」

ドリトル先生にそう伝えると、

「良かった。何より、君の初孫なんだから、君は早く会いたいだろうと思うよ。この間も、彼女にそう言っておいたんだ。一体、何がコロナだ。祖父母が孫に会えない理由がどこにある。湯気を立て、世の不条理に、怒鳴っております。

「そう言われても。明日、抱っこできるわけだし。」

どうも、マダム田中のためと言うより、ドリトル先生のためという気がします。というわけで、買って来た北京ダッグは半分を娘のところにお裾分けすることにしました。どうしても食べたいという、注文のコロッケやナスの揚げびたしなども加え、孫と初対面の日に幾つかお料理を持っていくことになりました。オットツと、イースターの兎のチョコレートも忘れずに持って行くことにしましょう。

孫のクロエは、筋肉質なのか、抱くとずしっと重さを感じます。目はメタリックなブルーグレイな色をしていて、頑固そうなきつい目つきでじーっとみつめます。いったいどんな子になるやら。目の色も髪の毛の色も、これからだんだん変わっていくようです。長いお付き合いになりそうです。

娘は母語としてフランス語で子供に話しかけ、父親は英語で話しかけ、ばーばは日本語で話しかけるといふ、とちらかった環境で孫は育っていくことになるようです。小児科の先生に「お子さんが綺麗なフランス語に慣れるよう、寝かしつける時にきちんとした小説を読んで、フランス語の音になじむようにしてあげてください。わかるとかわからないとかではなく、正しい音が自然に耳に慣れるようにすると良いかもしれません。」と娘は言われ、以来、寝かしつけながら15分間、モーパッサンの小説を読むようにしているようです。フランス語の発音は聞くのも話すのもとても難しいのです。

言葉は難しいものですが、ドリトル先生は、いまやグーグルで日本語を勉強する気になったのか、時々状況に合わせ、

「貴女は高い音をたくさんたてます。」

わーやたらと正しい日本語！でもインパクトにかけます。オープンスペースの我が家は食器を出し入れするだけで食器のぶつかり合う音が耳障りなのでこう言ったようでした。

「ガチャガチャうるさいって言うのも簡単かも。」

「ガチャガチャ！ちょっと待って。グーグルに出ていない！」

蛇に出くわした蛙のようにフリーズしてしまいました。

「うるさい、だけでもわかるけど。」

またある時は

「お腹があきました。」

「お腹があいた？穴でもあいたの？シャツでも破けたの？」

「違う。何か食べたいんだ。」

「それってグーグルが漢字を読み間違ったのね。空はお腹の場合はお腹がすく(空く)、席などの場合は席が空いている(すいている)だから。」

「そう言われてもグーグルにはお腹があく(空く)と書いてあるから。」

文化や言語の違いは難しいものです。アガサクリスティのように推理をしないと意思疎通がはかれません。

それでも季節は巡り、子供は育っていくようです。